

# 歩きたくなる小田原の魅力とは ～「なりわい(生業)」のストーリーを活かす～

こしがや「まち未来創造塾」

2025年8月13日(水)

持続可能な地域社会のデザイン  
第6回 まち歩きで出会う小田原の魅力

**丁野 朗**

観光未来プランナー  
全国産業観光推進会議副会長  
文化庁日本遺産認定・審査委員

2021年9月2日 清閑亭にて  
越谷「まち未来創造塾」小田原視察

歩きたくなる小田原の魅力とは

# 自己紹介

- **丁野 朗** 公益社団法人日本観光振興協会総合研究所顧問  
元東洋大学国際観光学部客員教授

- **現在の主要公職**

- ・文化庁日本遺産認定・審査委員会委員長（2015年～現在）
- ・文化庁文化観光推進法計画認定委員会委員（2020年～現在）
- ・文化庁100年フード有識者会議座長（2021年～現在）
- ＜産業遺産関係＞
- ・経済産業省「近代化産業遺産33群」選定委員（2007年～2008年）
- ・全国産業観光推進協議会副委員長（執行委員長）（2020年～現在）
- ・全国近代化遺産活用連絡協議会顧問（2019年～現在） など

- **研究以外の社会活動**

- ・経済産業省産業構造審議会臨時委員（地域経済産業分科会委員）
- ・スポーツ庁参事官技術審査委員、
- ・観光庁各種委員会委員（誘客多角化・域内連携・看板商品、インバウンド、観光新発見事業等の選定委員など）
- ・自治体等での活動：名寄市・栗原市・横須賀市・**小田原市**・上越市・小松市などの観光振興計画策定。越谷市観光協会副会長・まち未来創造塾長、十日町市・舞鶴市・益田市などの観光アドバイザー、高岡市参与、呉市顧問（文化観光）、高知県観光特使など
- ・日本商工会議所観光専門委員会学識委員など

- **その他**

- ・「いい夫婦の日」の提唱・事業化（1991年）
- ・「ハッピーマンデー制度」の提唱・創設（1992年） など



## 0. はじめに（小田原市との関り）



多摩大学大学院MBAの皆さんとの小田原WS（清閑亭にて）  
2015年12月



越谷まち未来創造塾生による小田原視察（小田原宿なりわい交流館にて）  
2021年9月

## ①小田原との出会いは2012年（H24）

- ☞ 大手旅行会社を中心とする観光専門家たちとともに小田原観光のコンサルティングを実施  
関東運輸局「観光まちづくりコンサルティング事業in小田原（2年間）」

## ②小田原市観光戦略ビジョンの策定（2016年（H28））

- ☞ 「おだわらTRYプラン」（H22）「地域経済振興戦略ビジョン」（H24）に基づいて、観光分野に特化した「小田原市観光戦略ビジョン～小田原ファン倍増宣言～」を策定

## ③地域DMO・DMCの設立のお手伝い

- ☞ 2016～17年（H28～29）小田原観光プラットフォーム（地域DMO）設置準備会に参画

## ④第2期小田原市観光戦略ビジョンの策定（2023年（R5））

- ☞ 2023年3月、第2期改定計画を策定

## ⑤越谷まち未来創造塾がモデルとした小田原

- ☞ 越谷まち未来創造塾（2015年創設）による視察と交流（2021年9月～）  
市民手作りの「まちのシンクタンク」をめざす

## ⑥小田原開催の各種フォーラムにも参加

- ☞ 2022年（R4）6月 全国産業観光フォーラムin小田原
- ☞ 2022年（R4）10月 日本まち歩きフォーラムin小田原

## ⑦その他小田原の関連事業にも参画

- ☞ 2018年（H30）文化庁「日本遺産：旅人たちの足跡残る悠久の石畳道（箱根八里）」の認定
- ☞ 2023年（R5）美食のまち小田原推進協議会に参画
- ☞ 2023年（R5）文化庁「江の浦測候所文化観光拠点計画」の認定
- ☞ 2024年～25年（R6～R7）「小田原市文化財保存活用地域計画」策定委員会への参画

# 1. 小田原の「観光」は何を目指すのか

## ～生業ツーリズム発祥の地～



- 小田原の「光」とは何か??
- 小田原市観光戦略ビジョンの狙い、目標とは何であったのか??
- 目標値は達成されているのか??

# 1. 小田原の「観光」は何を目指すのか

## ～観光戦略ビジョンと生業～

### 小田原市観光戦略ビジョンの狙い

- 「観光」とは各地域にある「光を観る」（『易経』の一文「観国之光」）という意味。
- **では、小田原の「光」とは何か??**
  - ☞ 戦国北条氏の時代から脈々と受け継がれてきた歴史・文化・生業を小田原の城下独自の「光」と捉える
- **観光戦略ビジョンは何を目指すのか??**
  - ☞ 首都圏からの日帰り観光地、箱根や伊豆といった温泉観光地への玄関口として、年間約450万人（当時）の来訪客を受け入れているが、今後さらに多様化する観光ニーズに応え、来訪客の滞在時間延長やリピーターの増加を図るため、恵まれた地理的環境を活かしながら、**小田原ならではの産業・文化・食などの地域資源を新たな「光」として活用していく必要がある。**

**観光振興の目的を、地域の光、とりわけ「生業（なりわい）」の振興と位置付けたのは、全国の観光戦略ビジョンの中ではじめて**

## 2. ビジョンが特に重視したこと

a

日常に溢れる城下独自の「光」が見えるまち

「まち歩き観光」  
を特記しました

1. 歴史・文化・なりわいといった城下独自の「光」を活かした「まち歩き観光」を大きな柱としていきます。
2. 首都圏からの良好なアクセスを生かし、来訪客に城下独自の「光」を組み合わせた本市の楽しみ方を提案することで、入込観光客数の増加と消費の促進を目指します。
3. 小田原城周辺を小田原観光の「間口」とし、城下独自の「光」を見て・触れて・買って手元に残るような仕組みを作り、小田原の「奥行」を感じていただくきっかけを作ります。

b

訪れた人が住みたくなるまち

「住みたい」まちこそ  
交流の基本です

4. 訪れた人が何度も本市を回遊し、小田原のよさを多く発見することによって、最終的に本市へ「住みたい」と思う来訪客を増やし、定住の人口増加につながる観光まちづくりを目指します。

c

市民一人ひとりの「小田原自慢」が聞けるまち

市民が自慢できる  
まちを目指します

5. 市民が城下独自の「光」を認識し、理解を深め、自らが発見した小田原の「光」を主体的に広められるような観光まちづくりを目指します。

# 3. 小田原市観光戦略ビジョンの目標値

本ビジョンでは令和12年（2030年）度までに下記を目指す

- 「入込観光客数1,000万人」
- 「観光消費総額484億円」

この目標達成に向け、40の施策を設定、そのうち14施策を**重点施策**として位置付けました。

さらに、重点施策を束ねる形で5つの「**戦略プロジェクト**」を設定し、地域経済の好循環の実現に向けた取組を推進する。

## 目標達成状況（2025年6月18日現在）

【入込観光客数】（目標達成率84%）  
約838万人（H26年451万人：185%増）

【観光消費総額】（目標達成率78%）  
約378億円（H26年137億円：276%増）

**\* 目標値は達成にむけて着実に推移  
もう少しです!!**

### ◆観光戦略ビジョンの基本的な方針



### ◆観光戦略ビジョンの施策と戦略プロジェクト



## 4. 第2期小田原市観光戦略ビジョン（現行計画）

第一期計画は令和4年度で終了。観光を取り巻く環境の変化や課題、「第6次小田原市総合計画」「地域経済振興戦略ビジョン」などの上位計画を踏まえ新たに改定（R5～R12年度）

①目的地として選ばれる小田原の実現 ～小田原の観光価値の訴求

②小田原の立地特性を最大限に生かす ～箱根・伊豆等との広域連携

③地域がうるおう観光都市の実現 ～宿泊の促進と観光消費拡大

④観光交流を産業振興と移住・定住につなげる ～観光交流による地方創生

⑤ 郊外エリアへ  
足を伸ばしてもらおう  
～回遊の促進

⑥ 文化を生かした観光振興  
～文化によるまちづくりとの連動

⑦ 若年層に訴求する  
新たな魅力の発掘・創出  
～新たな客層の取り込み

⑧ 外国人来訪客を  
素通りさせない  
～インバウンドの誘客

⑨ 小田原観光のレベルアップ  
～受入環境の質向上

⑩暮らしと観光が結び付いたまちづくり ～観光まちづくりへの市民参画

⑪推進力を支える基盤づくり ～推進体制の強化

箱根のついでじゃなく、小田原そのものを目的地としてお越し頂く

⑥は、この年末、文化庁「文化財保存活用地域計画」が認定される予定

## 2. 小田原には、なぜ「生業」が多いのか ～地政学（GEO）から見た小田原の特徴～



- 地政学から見た小田原の特徴とは  
～ブラタモリの視点から見た小田原の特色～
- 地勢（GEO）・植生・生態（BIO）の上に築かれた小田原の  
歴史・産業・都市・文化・気風など（SOCIO）の特色とは
- 特徴的な「生業」はその産物

# 小田原とその独自の地形



歩きたくなる小田原の魅力とは

# 「大正広重」吉田初三郎も描いた鳥瞰図

- 大正から昭和にかけて活躍し、「大正広重」と呼ばれた鳥瞰図絵師吉田初三郎。初三郎の目にも、この地域のダイナミックな絵が描かれている。
- 鳥瞰図は、「初三郎式絵図」と呼ばれる独自の作風を確立。その特徴は、見えないはずの富士山やハワイなど大胆なデフォルメとともに、まち中の路地までが丹念に書き込まれるなど、まさに 鳥の目と蟻の目が混在していた。



## 2007年に開業80周年を迎えた小田急沿線の名所図絵

2007年には、この復刻版ポスターが小田急の駅や車内に一齐に貼られた。80年を経てもデザイン的にも古くさくなく、むしろ大正モダンを受け継いだ昭和レトロの原点的画風と構成が斬新。

歩きたくなる小田原の魅力とは



# 小田原を俯瞰する

地域を俯瞰するには、地域を特色づける地形・地質、生態、そのもとでの暮らし文化や食・産業などを全体として体系づける必要がある。

小田原は、箱根に連なる緑の山々に囲まれ、南部は恵み豊かな相模湾に面し、中央部を南北に酒匂川が流れ、肥沃な足柄平野の大地が広がっています。西側の火山地には人工林、東の丘陵地や扇状地には果樹園や緑の多い住宅地が分布しています。これら固有の地形・地質（**GEO**）と、その大地が形成した林地や果樹栽培に適した生態系（**BIO**）、これら地形のもとに築かれた城下町や後の東海道宿場町の暮らし文化や食・産業（**SOCIO**）を体系的に整理して俯瞰することが重要です。

**SOCIO**  
(social ecology)

## 戦国一の城下町と東海道の宿場町文化

これら地形のもとに築かれた城下町や後の東海道宿場町の暮らし文化や特色ある生業、食・産業など。小田原の「生業」は、こんな環境の中で生まれました。

**BIO**  
(biography.biorogy)

## 豊かな自然生態

西側の火山地には人工林、東の丘陵地や扇状地には果樹園や緑の多い住宅地が分布。3万5千本の梅で有名な曾我梅林や高台の広大な蜜柑畑の中に造成された「江の浦測候所」（文化観光推進法拠点施設）なども、こうした自然生態の巣一角にあります。

**GEO**  
(geophysics)

## 天下の剣、箱根連山を擁する固有の地形

箱根に連なる緑の山々に囲まれ、南部は恵み豊かな相模湾に面し、中央部を南北に酒匂川が流れ、肥沃な足柄平野の大地が広がる。吉田初三郎が描いた鳥観図はそんな小田原の地形が見事に描かれています。

**天下の険・箱根を背景に戦国  
一の城下町と宿場町が形成**

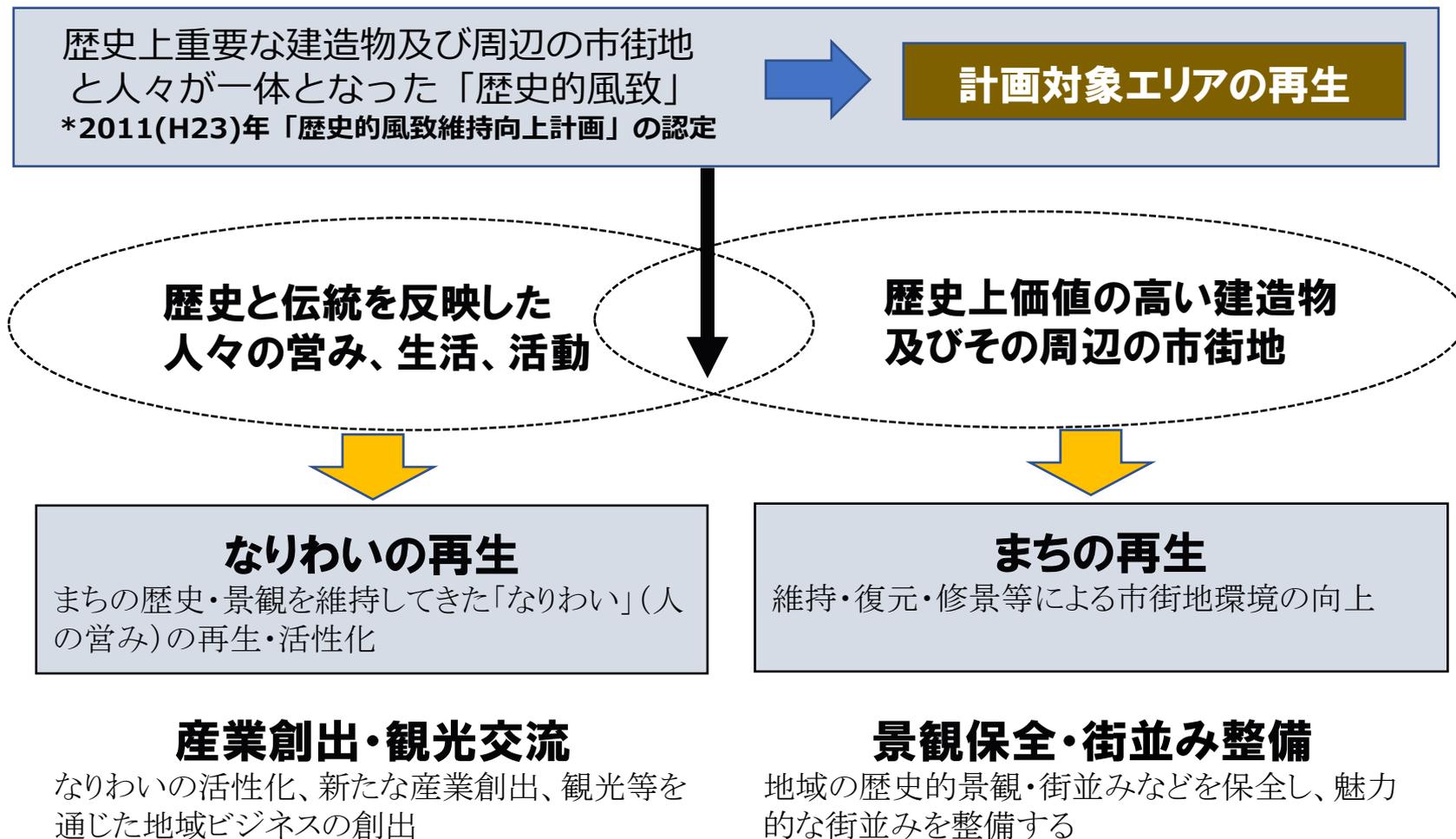
江戸時代末期～明治2年



江戸時代の東海道・小田原宿場  
戦国時代から続く「なりわい」が今も元気

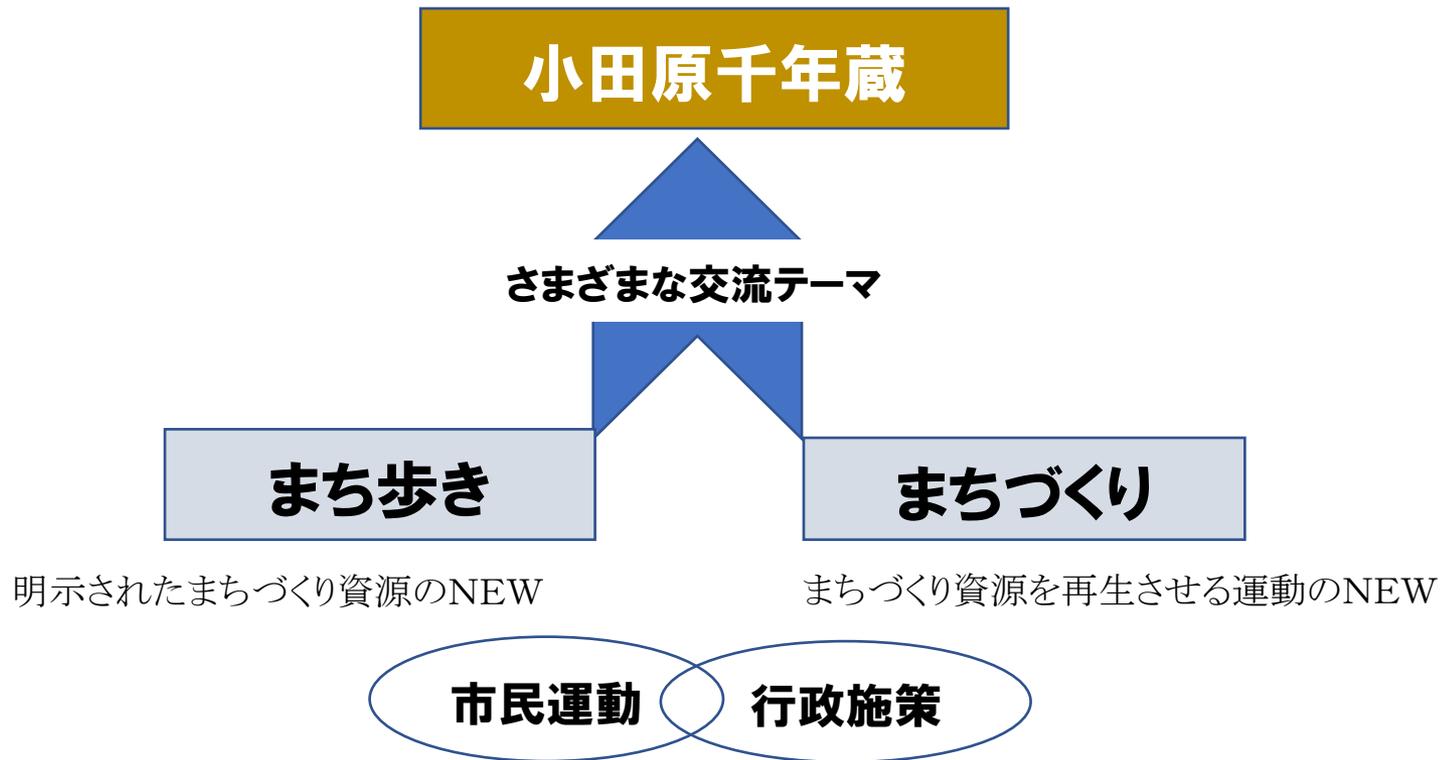
# 小田原のまちづくりとなりわいの再生

小田原では、こうした歴史的風致を活かした、まちの再生と、そのまちを歩くことによって「なりわい」を見直し、これらを再生させるという二つの活動が原点にありました。



# 「おだわら千年歳構想」

- その前史として2000年から「小田原市政策総合研究所」（市民主体のシンクタンク）が核となってスタートした中心市街地再生の構想&事業。市民と行政が協働し、「車座」と呼ばれるワークショップを重ねて、提案プランを事業として具体化し運営するという小田原版の都市再生運動に取り組む。
- こうした構想と取り組みの中で「小田原宿なりわい交流館（旧井上商店）」や「小田原街かど博物館」（まち歩きの拠点）などが生まれた。



# 「おだわら千年蔵構想」で示された多様なテーマ

テーマ ネットワーク	なりわい	粹・藝術	自然	格子戸や竹垣	公共施設
まちづくり資源	生業や生活の達人たち	茶や華など別邸の文化遺産	松林や竹藪水路や海浜	出桁・蔵造商家	商家や別邸の建築遺産
まち歩き	街かど博物館	登録文化財	保存樹・公園	こまちなみ条例	記念館など
まちづくり	なりわい歳時記	千年蔵プロジェクト	竹(地区)再生運動	町家活用運動	倶楽部組織

## おだわら車座



生業と生活の接点を探るWSなど  
おだわら角吉倶楽部(やんべえ倶楽部)

本物のものづくりブランド化にむけたWSなど

まち中の自然を見直すWSなど  
寺社調査竹再生プロジェクト

蔵や格子戸の街並みを見直すWSなど  
板橋蔵カフェ

交流施設整備(なりわい交流館)を機に倶楽部組織を考えるWSなど  
TMO回遊バス

**これらの活動が、今日まで続く裾野の広い市民活動として継続**

# 東海道の交流が育んだ、様々な「なりわい」



## 籠常かつおぶし博物館

(関東運輸局アドバイザー会議での留学生視察)

## 海の「なりわい」 かつおぶしや蒲鉾

歩きたくなる小田原の魅力とは

東海道の交流が育んだ、様々な「なりわい」



漆・うつわギャラリー

## 山の「なりわい」 漆器や寄木細工

歩きたくなる小田原の魅力とは

**東海道の交流が育んだ、様々な「なりわい」**

**フォレストアドベンチャー・辻村農園**

**山のなりわいは、こんな楽しみも**

歩きたくなる小田原の魅力とは

# 東海道の交流が育んだ、様々な「なりわい」



美しい富士山の眺望と曾我梅林

里の「なりわい」 曾我の梅や多様な柑橘類

歩きたくなる小田原の魅力とは

海の「なりわい」、山の「なりわい」、「里のなりわい」

全てが 六次産業(一次×二次×三次)

⑥×⑥×⑥が、小田原の魅力！



小田原どん



# 3. 「生業」をどう活かすか

## ～小田原流、産業観光の活かし方～



- 産業観光には多様なバリエーションがあります。  
「生業」を活かす小田原型の産業観光もその重要な形態の一つです
- 各地の産業観光の仕組みを学び、小田原型「生業ツーリズム」をさらに磨きましょう

# 「産業(なりわい)観光」の多様なバリエーション(諸類型) ①

- 産業観光の対象は、産業遺構から稼働(現役)産業、伝統産業から先端産業まで実に幅広い。それぞれのコンテンツには個性があり、その活用の考え方や手法にも多くのバリエーションがある。



# 産業資源をまちづくりに活かす視点と手法 「ものづくり」から「まちづくり」へ

## ①労働者など人々の暮らしや娯楽に着目

工場街と労働者食（加古川の「かつめし」など）、秋田県小坂町や茨城県日立市など鉱山の芝居小屋の活用や労働者の風呂などに着目（諏訪の千人風呂）など

## ②「職人・匠の技」を活かす

職人の伝統的な技や伝統産業のリノベーションを図り新たな産業を創出する（事例A：飛騨高山など）

## ③「産業ミュージアム」を核としたまちづくり

地域の産業ミュージアムを核としたまちづくり（「酢の里」と運河景観：愛知半田）、地域の産業ミュージアムと現役工場とコラボレーション（事例B：長野県岡谷市の「シルクファクト」など）

## ④産業にゆかりのある地域の食文化、固有の土産品などを活かしたまちづくり

地域の市場（錦や黒門、八日町など）や飲食街（北九州旦過市場）などの交流空間としての活用

## ⑤産業の固有景観を活用・転用した新たな交流空間の創造

「蚕都」上田の繭蔵などを活かした観光まちづくりや、繊維産業のシンボルノコギリ屋根工場のリノベーションとまちづくりの事例など（事例C：群馬県桐生のノコギリ屋根工場の活用）

## ⑥そして、地域に根付いた生業（なりわい＝まち工場や商店）のネットワーク化

事例D：おだわら「なりわいツーリズム」（神奈川県小田原市）など

## ■事例A 飛騨高山 伝統工芸の技とリノベーション

- 高山を代表する漆（春慶）が施された見事な作品。イタリア・クレモナ市の弦楽器職人、リカルド・ベルゴンツィさんと春慶の塗師・熊崎信行さんのコラボ作品である。「透き漆」と呼ばれる半透明の漆を使う春慶は軽くて丈夫、経年とともに色合いが深みを増す。楽器は演奏会でも披露される。
- 寛政6年（1794年）創業以来、230年の歴史をもつ老舗料亭「洲さき」。春慶塗の膳に洪草焼の器、何より200年以上続く30品の食メニューを10時間かけて頂く「宗和流本膳」。これら地域の食のおもてなし産業文化資源も観光資源としては極めて重要。

**伝統産業（技）を新たなイノベーションで未来に繋ぐ！**





重要伝統的建築物群の街並みの裏側には、こんな生業（なりわい）が息づいている。この生業を支える周辺の自然環境の保全も大きな課題

歩きたくなる小田原の魅力とは

## ■事例B 工場とミュージアムのコラボレーション 「シルクファクト」(岡谷蚕糸博物館)

世界遺産富岡製糸場ゆかりの片倉工業は、富岡製糸場の創業時（明治5年）のフランス式繰糸機や水分検査機、歴代の繰糸機や製糸関連機械等をコレクションするミュージアム。リニューアルオープンに併せて、地元の製糸会社（宮澤製糸：岡谷絹工房）の現役工場と合体し、**ミュージアムの中で現役工場を創業させる**というユニークな館となった。**地域の身近なミュージアムをまちづくりとまち歩きの出発点に！**

**\*文化観光推進法の拠点計画に地域のミュージアムを!!**



## ■事例C ノコギリ屋根工場の活用による新たな観光交流まちづくり (群馬県桐生市)

桐生には重伝建地域を中心に、かつてのノコギリ屋根の工場が200棟以上も残る。操業を停止した工場には、ベーカリー工房やパーマ屋さん、ミュージアム（有燐館や無燐館）、バイオリンなどの工房、手頃なフレンチ・イタリアンレストランなど、新たな生活機能が吹き込まれ、観光交流型のまちづくりを進めている。**大切なことは「市民が楽しむ普段着の空間」が観光交流の拠点になる！という視点**



## 事例D: 「なりわい」がツーリズムになる(神奈川県小田原市)

- 観光交流の究極的な目標は、いわゆる旅行業や旅館等の狭義の「観光産業」が活性化するだけでなく、地域の多様な「なりわい(生業)」が元気になること(「小田原市観光戦略ビジョン」。現在第2期目)
- これら地域の「なりわい」が連携することによってはじめて観光まちづくりにつながる。
- 小田原城・東海道の宿場町として栄えた小田原の「なりわいツーリズム」。18の地域の生業(商店など)が連携し、それぞれが「街かど博物館」として観光客の立ち寄り拠点になっている。
- 拠点は、昔の網問屋を改装した「なりわい交流館」である。

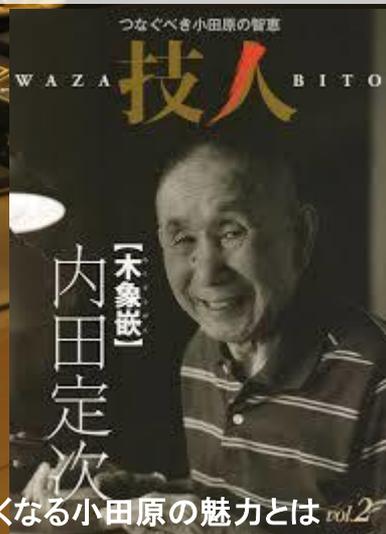
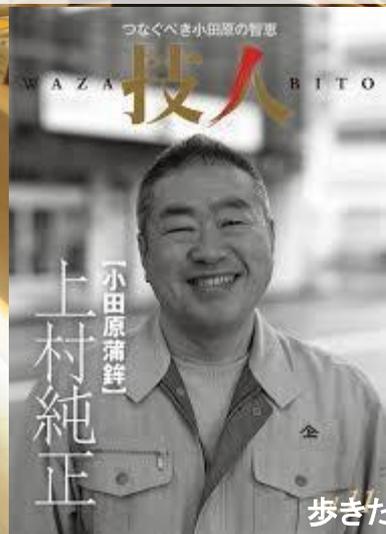
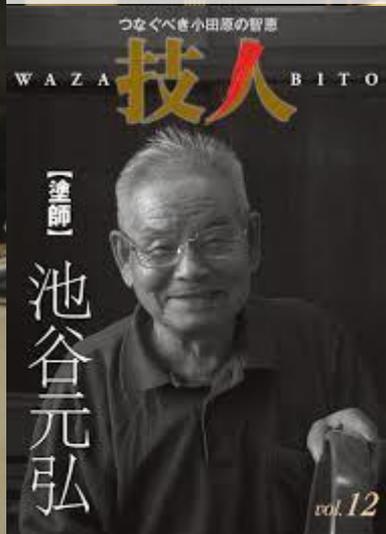


小田原駅地下街にある「HaRuNe小田原」(地域に根を張る)のコンセプトは、「Community Circle@小田原」。小田原には、歴史を未来に繋げ、生業を支える素晴らしい「**技人**」たちがいる。



小田原では生業(なりわい)を支える「ひと」をクローズアップ

駅地下の「街かど案内所」



歩きたくなる小田原の魅力とは

# 改めて小田原市観光戦略ビジョンの視点

## 住民にとって住んでよしの「まちづくり」

地域資源を生かきりながら、「住んでよし」のまちづくりと、「訪れてよし」の環境を整備し交流人口の最大化を図り、観光を通じた資金の獲得と地域内循環につながるような戦略ビジョンを策定

## 重点課題の一つには、観光交流を通じた地域文化の振興も

- 小田原には、史跡小田原城跡をはじめとする魅力的な歴史資源が存在する。山と海の豊かな自然環境を活かし、城下町・宿場町を中心に発展した**地場産業**や**なりわい**、**市民文化**などの小田原ならではの「文化」は、小田原市の重要な観光資源となっている。
- 小田原市の観光においては、このような小田原ならではの「文化」を活かすとともに、文化によるまちづくりと連動させていくことが求められる（\*文化庁「文化財保存活用地域計画の策定：本年12月に認定予定」）。

2022年6月開催の全国産業観光フォーラムin小田原  
では「なりわい文化」とまち歩きを討議



分科会の一つ観光地域ストーリー研究会でも、まち歩きと産業観光を討議（旧松本剛吉邸）



# 「産業観光」をどのように展開していくか

- 産業は古来よりあるが、「観光」行為としての産業観光は1960年代の激甚な公害を経た1990年代以降に本格化。その産業観光はその後大きく発展。現在は**第3～第4段階**に。

第一世代

1960年～ ⇒公害の社会問題化とその対応

- 工場開放と視察への取り組み

1970年～ ⇒地域の歴史的文化財保存;文化財保護法の改正

- 歴史的街並みを「群」として保存する仕組みの創設(1975年)

第二世代

1990年～ ⇒「近代」に対する眼差し(意識)の変化

- 「原爆ドーム」の世界遺産登録(1996年)
- 文化庁「活用なければ保存なし」の提言(1996年)

2000年～ ⇒産業観光による地域活性化事業の本格化

- 「全国産業観光フォーラム」(2000年名古屋開催)がきっかけ

第三世代

2000年～ ⇒新たな投資・事業としての産業観光

- 「見せる」から「ご覧頂くための工場(factory Park)」へ

第四世代?

? ⇒地域ビジネスとしての産業観光

- 地域ぐるみ産業創出・集客交流ビジネスの場づくり
- 海外顧客(インバウンド)に向けた展開

# おわりに 歩きたくなるまちの魅力とは

いわゆる「観光地」と日々の暮らしの場が乖離せず、まちなかのどこでもが「歩き・歩ける」楽しみのあるまちこそ、究極の観光交流都市ではないか。今後のさらなる編集視点に、いろいろと工夫の余地もある。

## ① 「あるき」をストーリー（物語）化する

ブランド地域には「物語」があります。地域のストーリーを歩いて発見する、さらなる仕組みづくりが必要です

## ② 「あるき」を科学する

地域文化資源を深掘りし、体系化して活かす。文化財保存活用地域計画などを活かし、各時代ごとの歩きを楽しむ（再生古地図によるまち歩きなど）

## ③ 「あるき」の拠点を活かす

地域文化資源の拠点となる地域ミュージアム（なりわい交流館を起点としたミニミュージアムネットワーク）などを活かす

## ④ 「あるき」をマネジメントする

「あるき」を地域の収益源とする新たな仕組みをつくる（長崎さるくなど）

## ⑤ 「あるき」をネットワーク化する

あるきの拠点のネットワーク化とともに、全国のまちあるき観光を目指す地域とのネットワークも活かす **＜今年の日本まちあるきフォーラムは12月13日～15日 千葉県佐原（香取市）で開催＞**



ご清聴ありがとうございました